令和5年度フェロー認定（12名）	
氏名	**東 雄一**
認定時の所属	自動車技術会
抱負	昨今、SDGsで提起された持続可能な社会を実現するため、温室効果ガスの排出削減、更にはカーボンニュートラルの実現といった難度の高い技術課題が非常に多く生まれています。このような状況の下では、様々な科学技術領域がコラボレートし、知恵を出し合って様々な技術課題解決にチャレンジする共創研究こそが非常に重要です。このような学会間連携を推進する上で日本工学会は非常に重要な場であり、私もその一員として学会連携活動の推進に注力し、日本の科学技術と工学の更なる発展に貢献して行く所存です。 特に、私が長年にわたって従事してきた自動車技術の世界では様々な学術領域の研究から生まれた数多くの技術を活用して、より良いくるま創りを進めているので、自動車を社会実装先として設定している研究活動と自動車側のニーズをつなげ、目標を共有し、産官学連携を強化して研究開発を加速するような活動を推進して行きたいと考えます。 また、将来必要となる研究課題により早く取り組むことができるよう、ユーザーのニーズをいち早くキャッチし、共有するといった活動にも取り組んで行きたいと考えます。 こういった活動を通じ、日本の工学研究の更なる発展に微力ながら尽力してまいります。
氏名	**大崎 博之**
認定時の所属	東京大学
抱負	これまで，電気工学，超電導工学，低温工学などの分野で研究教育，あるいは学会活動などを行い，またそれに基づく社会貢献につながる活動も行ってきました。昨今の様々な課題は広い分野に共通するものが多く、また、分野間で連携して取り組むべきものも多いと思っております。これらに対して日本工学会を通じて取り組み、広く工学の進歩発展のために、さらには工学分野に関係する人々の幸福につながるように貢献していきたいと思っております。
氏名	**大政 謙次**
認定時の所属	高崎健康福祉大学
抱負	現在、農学や環境学分野での活動を中心としていますが、若い頃から画像工学や情報工学等の工学的手法を利用した研究を行ってきました。国立環境研究所（旧国立公害研究所）では、地域環境や地球環境の問題解決のために分野横断的な研究プロジェクトを実施し、IPCCの報告書のExpert Reviewerを経験しました。東京大学に異動してからは、農学生命科学研究科に所属しながら、全学的な「動け日本」プロジェクト(2002-2003)の農学分野を担当し、ICT利用の環境～生産～消費に至る新しいアグリシステムの提案を行いました。また、日本学術会議での活動(1999～現在）を通して、「農学の新展開に向けて―情報科学と数理・物理科学の視点を取り入れた分野横断型農学―」学術の動向(2016)、学術会議叢書27「持続可能な社会への道～環境科学から目指すゴール」(2020)等を取り纏めました。特に、学術会議叢書27の取り纏めは、工学分野の会員、連携会員と協力して行いました。以上のような分野横断的な活動の経験は、日本工学会フェローの活動においても役立つものと考えます。
氏名	**岡部 寿男**
認定時の所属	京都大学
抱負	我が国が提唱するSociety 5.0は、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させシステムによって開かれるデータ駆動社会です。人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有されることで、今までにない新たな価値が生み出されることが期待される一方、社会のデジタル化、デジタル・トランスフォーメーションが急激に進展することで、あらゆるところでセキュリティリスクやプライバシーリスクが懸念されるようにもなっています。これまで情報学分野、特にインターネットにおけるセキュリティとトラストに関する研究開発に携わってきた経験を踏まえて、先輩方のご指導を仰ぎつつ、情報技術と工学の諸分野の学際的な融合とそこから生まれる創発を推進し、デジタル社会の実現と課題解決に貢献できればと考えております。

氏名	小林 潔司
認定時の所属	京都大学
抱負	日本の高等教育機関における研究・教育がテクノロジー中心となり、教育カリキュラムからエンジニアリング科目がなくなって久しい。本来実学であるべき工学の教育・研究の成果が、市場のニーズと乖離するという不幸な結果を招いている。また、せっかくの技術開発の成果があっても、我が国に技術の市場性も含めてグローバルな視点から技術評価を行える人材や制度が育っていない。その結果、大学・研究機関・企業の研究開発の成果が社会実装されず、日本企業の要素技術依存的な体質から一向に脱皮できない事態が常態化している。日本的イノベーションを実現・推進していくためには、多様性と包摂性の視点から工学界のニーズとシーズをコーディネートし技術政策論を展開しうる工学プラットフォームとして日本工学会が果たす役割は極めて大きい。土木学会長、日本学術会議土木工学・建築学委員長等の活動を通じて培ってきた経験を踏まえ、旧来のエンジニアリング分野の領城を超え、互いに越境しあう実践的エンジニアリング像の実現をめざして、日本工学会の活動にささやかではあるが意義のある貢献をなしえたら望外の幸せである。

氏名	佐田 豊
認定時の所属	東芝
抱負	産業界は、持続的社会実現へ貢献できる新たなソリューションの創出や、サーキュラーエコノミーに適う新たなモノづくり、これらを通じた日本産業の国際競争力の回復という大きな課題を抱えている。この課題の克服には、各工学学術領域を深化（アナリシス）する学術界と、新たな価値やソリューションとなるシステムの創出を果たさなければいけない産業界とが、進むべき方向を具体的に共有し、技術育成、価値創出、価値の実証、実装に取り組むことが不可欠である。日本機械学会を含め、日本の学協会は産業界会員の減少が進み、学と産の対話はますます難しくなってきている。各学協会と密に連携できる日本工学会にて、個々の学協会の枠を超えて、これからの学と産の連携のあり方、協働による価値創出の取組みを具体化し、その中での工学学協会のあり方を再定義していきたい。

氏名	須藤 亮
認定時の所属	東芝
抱負	日本工学会理事副会長として主に産業界の立場で業務を遂行してきた。その間、経団連イノベーション委員会企画部会長および（社)産業競争力懇談会（COCN）の実行委員長として、産業界とアカデミア、関連省庁との連携によるイノベーション政策の実現に向け多くの提言をまとめ実行してきた。さらに1998年からは内閣府にて産学連携PJであるSIPのプログラム統括として大きな国プロを取りまとめてきた。これらの経験を活かし、日本工学会フェローとして学会、大学と産業界との連携をより一層強固なものとするために取り組んでいく所存である。

氏名	寶 馨
認定時の所属	京都大学
抱負	真理を追求する科学と、その成果を技術として開発・実用化し価値を生み出す工学、これら両者の役割は、地球社会の持続可能な発展において不可欠であり不滅です。私は、特に、環境と開発及び自然的・人為的災害の防止軽減の観点から、工学の意義を明らかにし、それが広い学問分野との連携のもとに新たな展開を見せることを志向しています。大学では、土木工学分野での研究教育に勤しみ、また、学際融合的な教育プログラムを主導してグローバル人材の育成に注力してまいりました。大学を離れるこれからは、次のステージで、社会の多様な人々や組織と関わり合いながら、レジリエントな世の中の構築のために、工学の力を遺憾無く発揮できるように努めて参る所存です。

氏名	中川 八穂子
認定時の所属	日立製作所
抱負	日本の産業競争力の源泉は科学技術力だったが、企業経営者の「研究開発力」評価は低下（IMD'21「世界競争力年鑑」によると'18から3年間で約30%低下）しています。また工学者特にITエンジニアは給与も職業的地位も低く、日本のデジタルトランスフォーメーション(DX)への遅れ(「2025年の崖」問題）や、優秀人財の海外流出等が進んでいます。 日本工学会において活動の機会を与えられましたら、工学者の職業的地位の向上の為のリスキリングや資格認定の仕組み、各学協会会員が自ら所属する分野だけでなく工学共通の知見に触れられる仕組み等の改善について微力なりとも尽力し、企業経営者/エンジニアの日本の競争力強化に対する認知度向上に貢献したいと考えております。

氏名	藤田 壮
認定時の所属	東京大学
抱負	循環経済・脱炭素を実現する産官学民が連携する社会実装研究を進めてまいりました。環境と経済、社会が複合的に転換する中で、日本工学会が様々な分野を横断的に束ねて新しいシステムイノベーションを構築することに微力ながら貢献できればと願っております。学術面からの情報提供、計画支援システムの構築、科学的合意形成を通じて実現して検証することを多くの自治体や企業の皆様との連携で推進します。その要素化、一般化によって環境成長拠点の計画と評価モデルを開発して、その成果を国内都市から海外に展開していくことを目指します。環境、都市、産業政策を束ねる将来的な地域の目標像を描き、それを実現する道筋の定量的な提示を通じて、部分最適になりがちな脱炭素、持続可能社会に向けての政策を計画、構築して、その進捗をさらに科学的に検証して社会システムに反映するプロセスの実現に貢献したいと考えています。

氏名	三村 衛
認定時の所属	京都大学
抱負	このたび、公益社団法人地盤工学会から日本工学会フェローに推薦いただくにあたり、日本工学会フェローとしての活動について抱負を述べさせていただきます。私は地盤工学を専門として京都大学で研究を続けてまいりましたが、見ることのできない地下の地盤を対象として、その可視化、モデル化を通じて、地震や降雨といった自然外力や、構造物建設に伴う載荷によって地盤がどのように変状し、破壊するのかという力学に拠点を置いた取り組みをしてまいりました。昨今の異常な豪雨や地震の頻発を目の当たりにし、ライフワークとしてきた研究の重要性を再認識しており、引き続きシニアの専門家として社会に貢献することは責務であると考えています。在職中に本学の防災研究所にも在籍しておりましたので、地震時地盤災害に関連した、地盤の強震動や砂地盤の液状化災害についての研究を実施してまいりました。災害事象を通じて、土自体の客観的な力学特性に加え、地域によって異なる地盤構造が災害形態に強く影響を及ぼすことがわかっており、ローカルな地盤条件に充填を置いた災害研究については継続的に進めていきたいと考えております。加えて多岐にわたる専門分野の集合体である日本工学会においては、学際的な交流を通じて異なる分野の専門家との協働という機会を得ることとなります。考古学や保存科学と協働した地盤遺跡の保全、情報学と協働した地盤情報データベースの利活用、機械工学と協働した地盤挙動計測センサーの開発と利活用など、継続的に取り組んできた学際研究に磨きをかける好機と考えており、積極的に貢献したいと考えております。

氏名	宮良 明男
認定時の所属	佐賀大学
抱負	佐賀大学に着任以降，熱工学や冷凍空調工学の分野を中心に研究活動を続けておりますが，オゾン層破壊や地球温暖化，カーボンニュートラル社会の実現など環境問題や社会的な要求に対応しながら具体的な研究目標を設定し，いくつかの研究成果を得ることができました．これらの成果は，大学内で個人的な研究を行うだけで得られたものではなく，様々な学会活動を通して得た知識や国内外の研究者との連携，意見交換による情報などが無ければ達成できなかったものです．それぞれの分野で学術団体として学協会が存在することの意義や重要性を感じているところで，約100学協会で構成されている日本工学会はさらに大きな役割を担っているものと考えております．環境問題をはじめ，工学が解決しなければならない多くの社会課題が顕在化しています．私自身の知識は狭い専門分野とこれまでの学会活動の経験に限られていますが，それを活かして日本工学会の活動に協力したいと考えております．